

第29回麻布環境科学研究会 一般演題1

環境学習の評価に関する一考察

—さがみはら環境まつりを題材に—

岡本 弥彦¹, 村山 史世², 樋口 和也³, 山本 蓉⁴¹麻布大学教職・学芸員課程, ²麻布大学環境科学科, ^{3,4}麻布大学環境政策学科4年

1 はじめに

学習活動を展開する上で、設定した目標の達成状況、成果や課題、学習者の意識や行動の変容などを診断・点検し、その結果を次の学習の工夫・改善に活かすことは、極めて重要である。学校教育においては、小・中・高等学校の学習指導要領に基づいた評価規準の設定や、大学のシラバスにおける学習目標の設定などを通して、児童・生徒・学生の学習の習熟度や到達度が評価されている。これに対して、社会教育においては、教育法令等により明確な教育目標が設定されているわけではなく、学習目標や評価規準等の設定は社会教育の実施者・担当者に委ねられているのが現状である。

本報告では、「さがみはら環境まつり」を環境学習に位置付け、社会教育としての環境学習の評価を試みた事例を紹介し、その成果と課題について考察する。

2 さがみはら環境まつり

さがみはら環境まつり（以下、「環境まつり」と略す）は、相模原市民との環境コミュニケーションを行うイベントであり、行政・市民・事業者・大学の協働で組織した実行委員会が主催者として事業運営に当たっている。平成17年度から毎年6月の環境月間に開催し、平成21年度で第5回を迎えた。麻布大学は、第1回から相模原市とともに共催の形で参画している。環境まつりの主たる目的は、環境の保全及び創造に係る活動を促進することであるが、環境学習の推進も目的の一つとしており、市民参加型の環境学習の機会を提供している。

第5回（平成21年度）の環境まつりでは、環境学習の位置付けを明確にして学習活動を充実させるた

めに、評価活動に力を注ぐことになった。そこで、実行委員会本体から独立した評価部会を設けた。本報告者は、実行委員会のメンバーであり、今回その評価部会の委員を担当した。

3 評価の内容

教育活動は、計画・実践・評価という一連の活動を繰り返しながら行われるものである。教育活動における「評価」とは、単に活動の結果の善し悪しを判定するだけのものではなく、学習目標の達成状況を確認し、その結果に応じてその後の教育計画を調整する活動である。社会教育での環境学習においても、評価実施対象者（誰が評価するのか）、評価項目（何を評価するのか）、評価方法（どのように評価するのか）などを明確化した上で、評価を実施することが必要である。

(1) 実行委員会企画について

実行委員会企画とは、第5回環境まつりのテーマ「想像しよう・創造しよう！20年後のさがみはら～やすらぎと潤いのあふれる環境都市～」に沿った企画であり、市民からの提案も踏まえながら実行委員会が主体となって取り組んだものである。相模原の担い手となることへの意識の高揚を図った『みんなで語ろう相模原の過去、現在、そして未来を』、様々な環境保全活動を発表する『やすらぎと潤いあふれる環境都市を創るエコ活動紹介』、小学生の環境意識の向上を図ることをねらった『環境フレンドパーク（スタンプラリー）』など、計11種類の企画が実施された。これら実行委員会企画の評価については、各担当者が企画の目的・目標・実施内容・評価項目などを記入する「企画シート」を予め作成し、

実施後に自己評価した。また、評価部会委員は、各企画会場において学生アシスタントとともに、企画シートに基づいて第三者評価（外部評価）を行った。

(2) 出展ブースについて

出展ブースは、環境活動団体・学校・事業者・行政などが日頃取り組んでいる環境活動を紹介する場である。相模川を愛する会による『相模川の生き物たち「おさかなカード」作成コーナー』、麻布大学国際コミュニケーション研究室による『環境にやさしいソーラーッキングのプレゼンと実演』、八千代銀行による『環境に配慮した金融商品・活動などの取組み』、相模原市市民協働推進課による『ご存じですか？街美化アダプト制度』など、計45団体によるプログラムや展示が実施された。出展ブースの評価については、実行委員会企画の評価と同様に「出展シート」に基づいて、出展団体による自己評価及び評価部会員による第三者評価を行った。また、目標の達成度や他の団体との交流などを尋ねる質問紙調査（出展団体アンケート）も実施した。

(3) 来場者及びボランティアについて

来場者（約2,400人）に対しては、年齢・性別・住所、環境まつりに参加した理由などを尋ねる質問紙調査（来場者アンケート）を実施した。質問紙は、受付で配付しスタンプラリーと連動させて回収した。

また、高校生・大学生ボランティア（37人）に対しても、学校種・学年・性別・住所、ボランティアに参加した理由などを尋ねる質問紙調査（ボランティアアンケート）を実施した。

4 結果と考察

実行委員会企画については、概ね目標を達成できたという評価結果となった。こうした評価結果は、企画担当者の自己評価の結果と評価部会委員による第三者評価の結果とを比較することにより、評価の客観性を高めることができたと考える。ただし、11種類の企画を比較すると、企画シートへの記入内容の不統一や軽重があり、目標や評価項目が明確でないものも少なくなかった。企画段階において、企画シート作成の意義についての共通理解や、担当者間での意見交換などにも時間を掛ける必要があったと考える。

出展ブースについては、「企画シート」の目的・目標・評価項目に照らして自己評価をしている企画団体は少数であった。また、出展団体アンケート（回

収率62%）からも、当初の目的・目標とは無関係な評価に留まっているものがほとんどであった。事前の出展団体説明会の際に、評価についての趣旨説明を徹底する必要があったと考える。

来場者については、アンケート結果（回収率12%）から、①環境まつりや実行委員会、出展や企画への肯定的意見、②学習できた達成感、③将来に向けた学びや行動の意欲、④次回以降への提案など、肯定的な評価や実行委員会への感謝の気持ちが多数見られた。しかし、今回のテーマ「想像しよう・創造しよう！20年後のさがみはら～やすらぎと潤いのあふれる環境都市～」に言及した意見等は皆無であった。市民へのメッセージの発信や環境コミュニケーションの観点からは、不十分な点が指摘されたと考える。

ボランティアについては、参加した成果に関する最も多かった回答が、昨年度までの「交流・協力」に関するものに対して、本年度は「環境・教育」に関するものとなった。昨年度までは、多くのボランティアがイベント担当者や出展者の補助などの役割を分担していたことから、大学生・高校生が市民や市役所の職員、NPOの役員などと触れ合う機会が多かったと推測される。本年度は、受付や記録などの仕事を中心であったため、仕事の空いた時間帯に、または仕事をしながら企画や出展を見て廻ることができ、環境について自ら学習する機会を多く得ることができたと考える。

5 終わりに

今回、環境まつりを環境学習の場ととらえ、企画シートの作成や質問紙調査の実施を通して、実行委員・出展者・来場者・ボランティアによる自己評価とともに、評価部会による第三者評価を行った。企画シートの導入は、各企画担当者がその作成を通して環境学習の進め方についての認識を深め、プログラムの立案・実践の方法を学ぶ機会になった。また、評価部会による第三者評価を行ったことにより、評価の客観性を高めることができた。しかし、試行錯誤しながらの評価活動となったため、実行委員との共通理解や出展者への趣旨説明は十分とは言えなかった。次年度は、こうした点を改善し、環境まつりが一層充実した環境学習の場となるよう工夫することを課題としたい。